

## オーストリアのフォラルベルク州における緑地帯 への工場拡大計画に抗する2番目の市民運動

山本, 健兒  
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7326133>

---

出版情報 : 経済学研究. 91 (2/3/4), pp.1-30, 2024-12-27. Society of Political Economy, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



# オーストリアのフォラールベルク州における 緑地帯への工場拡大計画に抗する 2 番目の市民運動

山 本 健 児

1. はじめに
2. ヴァールガウ地域とルデシュ村の概要
3. フォラールベルクオーストリア放送協会の報道内容と市民運動
4. 市民運動組織の活動とルデシュ村ノイゲートへの工場進出計画の問題点
5. 2015年に決定されたルデシュ村の「空間的な発展コンセプト」
6. おわりに代えて（中間的結論）

注  
文献  
英文要旨

## 1. はじめに

オーストリアのフォラールベルク州政府が保全すべきとして1977年に設定した広大な緑地帯の一部に、財政力強化のために工場誘致を2015年に決定したヴァイラ村当局に対して抗議する市民運動が2016年11月末以降に進展したことを筆者は本誌前々号（山本 2024b）で論じ、その緑地帯が2017年夏に保持される状況に展開したこと、及びその展開に同州のさまざまな民主主義的動向が寄与したことを前号（山本 2024c）で明らかにした。そしてこの前号の最後で、参加民主主義の一形態である市民評議会が、市民運動の主張に近い緑地帯保全重視の結論を出し、これを州政府は尊重することになると付言した。

ところが、2018年にまたもや類似の市民運動が同州のヴァールガウ（Walgau）に位置するルデシュ（Ludesch）村において発生した。州政府

設定になる緑地帯がこの村にもあり、その一部に州内の飲料大企業ラウフ社（RAUCH Fruchtsäfte GmbH & Co OG）<sup>1)</sup>が生産拡大のために工場設立計画を持っていること、そして村当局のみならず州政府もその計画を推進していることが明らかとなり、緑地帯の保全を重視する村民などがその計画を阻止すべく行動を起こしたのである。

筆者がこの市民運動の存在を知ったのは、ラウフ社に関する情報を得るべくインターネットで検索していたところ、たまたまヒットしたフォラールベルクオーストリア放送協会発信になるニュース（Vorarlberg ORF.at 3.5.2018）によってである。

本稿の目的は、緑地帯の保全のために立ち上げられたその第2番目の市民運動の展開を描くことである。その展開と結末は、あらかじめ述べるならば、ヴァイラ村でのそれと大きく異なる。ただし、最近年に至るまでの展開を描くこ

とは1本の雑誌論文に与えられた紙幅では困難なので、本稿では2019年初めまでの動きに限定して叙述する。そのための最重要資料は市民運動組織が開設したホームページ (<https://www.initiativeludesch.at/>) から入手できる記録文書である。また、インターネットによって収集したゲマインデやその連合体が公表した公文書、関連する諸企業のホームページから入手した資料やマスメディア報道も本稿のために利用した。以下、まず第2節でルデシュ村の概要を描き、ついで第3節で Vorarlberg ORF.at (3.5.2018) の報道内容を紹介し、第4節で主として市民運動組織が発信した文書に基づいてその運動展開を描き、第5節で公文書の内容に基づいて市民運動組織の主張の適否を判断し、最後に本稿の内容を要約する。

## 2. ヴァールガウ地域とルデシュ村の概要

ヴァールガウはフォラールベルク州の南部に位置し、中世以来の都市であるフェルトキルヒ (Feldkirch) とブルーデンツ (Bludenz) に挟まれた農村的地域である。南東から北西に向かって流れるイル川 (die Ill) の河谷平野とその周囲の山地から構成される。イル川は、フォラールベルク州の最南東部に位置するモンタフォン (Montafon) 地域から北西方向に流れ、ブルーデンツ、ヴァールガウ、そしてフェルトキルヒを貫流してアルペンライン川 (der Alpenrhein) に合流する。ヴァールガウはライントールよりも農村的色彩が濃く、その南東部にルデシュ村が位置する (図1)。ヴァールガウの緑地帯もライントールと同じく1977年に州政府が設定したゲマインデ横断的なもので、この地域の平坦部の大部分を覆っている。

ヴァールガウは南東のブルーデンツ市から北西のフラスタンツ (Frastanz) 町の間に位置している18ゲマインデから構成される地域名である (Amt der Vorarlberger Landesregierung, Abteilung Raumplanung und Baurecht (VIIa) und Landesstelle für Statistik 2018: 9)。他方、レギオ (Regio)・ヴァールガウを意味する場合もある。この場合にはその18ゲマインデからブルーデンツ市を始めとする南東部に位置する5つのゲマインデを除く一方で、ライントールの山間斜面地ゲマインデであるゲフィス (Göfis) を含んで14ゲマインデから構成される地域名でもある<sup>2)</sup>。この14のゲマインデのうち北西部に位置する8ゲマインデはフェルトキルヒ行政管区 (Bezirk) に属する、他の南東部に位置する6ゲマインデはブルーデンツ行政管区に属する (図2)。つまりレギオ・ヴァールガウは、フェルトキルヒとブルーデンツという中世以来の都市の間に挟まれた農村部であり、州の行政地域区分からすれば一体的な地域というわけではない。しかしその行政区分とは無関係に、レギオ・ヴァールガウは経済・自然・社会・文化といったほぼあらゆる面でのゲマインデ間の協力を強化するために結成された<sup>3)</sup>。

ルデシュ村はブルーデンツ行政管区に位置し、かつレギオ・ヴァールガウに参加しているが、この部分地域であるブルーメネク (Blumenegg) に属している。ブルーメネクとはもともとルデシュ、テューリングゲン (Thüringen)、ブルーデシュ (Bludesch) の3か村とグローセスヴァルザータール (Großes Walsertal) の大部分を支配していた領主の名前であるが<sup>4)</sup>、現在では上の3か村から構成される地域の名称となっている。

ルデシュ村は面積約11km<sup>2</sup>、2023年末時点での人口4009名のゲマインデで、グローセスヴァ

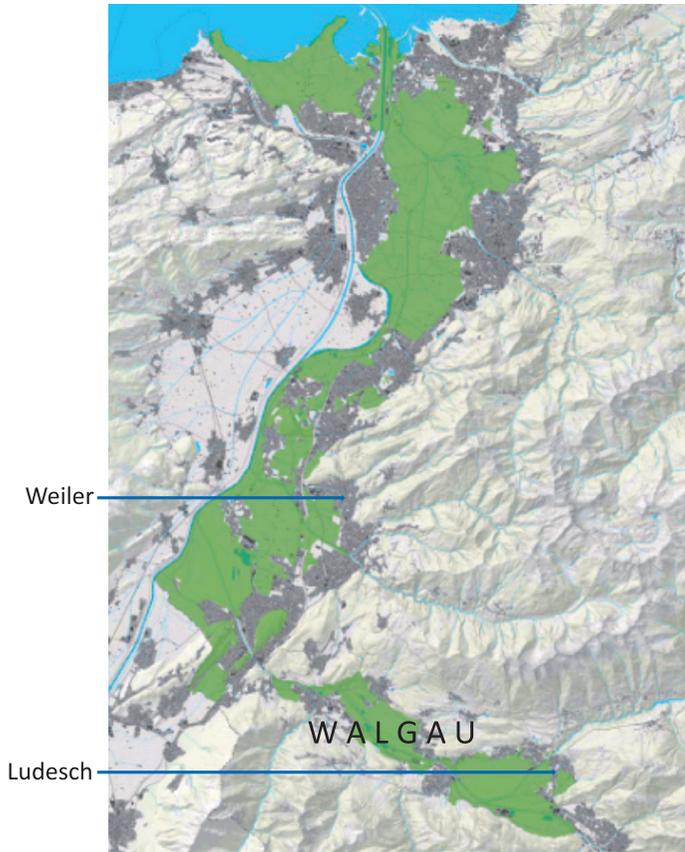


図1 フォラルベルク州政府が設定している緑地帯

原図はカラーで緑色（本稿の印刷版では灰色）の部分で緑地帯。最北部のボーデン湖畔から南に向かって幅広く連なるのがラインタールの緑地帯。この図の左下でいったん途切れて南東方向に帯状に連なる部分がヴァールガウの緑地帯（その最北西端から最南東端までの距離は約15km）。

出所：Jahresjournal der Abteilung Raumplanung und Baurecht, Amt der Vorarlberger Landesregierung 2017. FREIRAUM | 1 Vierzig Jahre Landesgrünzone, S.17に村の位置と WALGAU という地域名を付加。



図2 ヴァールガウとグロースェスヴァルザータールにおけるゲマインデの位置関係

出所：Amt der Vorarlberger Landesregierung Abteilung VIIa – Raumplanung und Baurecht (1996) *Strukturdaten Vorarlberg*, S.9 掲載地図の一部に地域名を付加。

ルザータールから南西流するルッツ川 (die Lutz) がヴァールガウ平坦部に達してさらに南西流する左岸に位置する。村の中心の標高は約500mであるが、北端部はルデシャベルク (Ludescherberg) と称される山地に含まれる山間地・斜面地である<sup>5)</sup>。

表1から明らかのように、この村の人口は、フォラールベルクからインスブルックに通ずる鉄道が敷設された後も1千人を下回って停滞していたし、1930年代に1千人を上回ったとはいえ、その増加率はフォラールベルク全体の増加率を下回っていた。しかし1970年代以降にその人口増加率は州全体のそれを上回るようになり、2010年代に3千人を上回った。これはレギオ・ヴァールガウに1970年代に相次いで立地した金

属機械関係の大規模工場などの雇用効果が表れるとともに、ブルーデンツやフェルトキルヒに立地する事業所などで就業している人たちが転入してきたことによる。

表2から、ルデシュ村に居住する就業者は2011年の1666人から2021年の1948人へと約300人も増加したが、その大部分は村外への通勤者であることが分かる。ルデシュ村への通勤者数も増えてはいるが村外への通勤者数の半分弱の人数でしかない。村外への通勤者は2020年の就業統計<sup>6)</sup>によれば、最寄りの都市ブルーデンツが267人と最も多いが、これについてネンツィング (Nenzing) が152人、フェルトキルヒが141人、ニュツィダス (Nüziders) が138人、テューリンゲンが127人となっている。ブルーデンツと

表1 ルデシュ村とフォラールベルク州の人口推移

人口増加指数は1951年を100とする。

年	人口		人口増加指数	
	ルデシュ村	フォラールベルク州	ルデシュ村	フォラールベルク州
1869	708	102,702	56	53
1880	765	107,373	61	55
1890	721	116,073	57	60
1900	733	129,237	58	67
1910	803	145,408	64	75
1923	816	139,979	65	72
1934	1,066	155,402	85	80
1939	1,075	158,300	86	82
1951	1,257	193,657	100	100
1961	1,408	226,323	112	117
1971	1,765	277,154	140	143
1981	2,146	305,164	171	158
1991	2,463	331,472	196	171
2001	2,805	351,095	223	181
2011	3,377	370,440	269	191
2021	3,665	401,037	292	207
2024	3,727	409,973	296	212

資料：Statistik Austria のホームページで „Ein Blick auf die Gemeinde“ と題するウェブサイトから2024年6月18日に入手。

<https://www.statistik.at/atlas/blick/#>

<https://www.statistik.at/blickgem/G0201/g80115.pdf>

表2 ルデシュ村住民就業者の就業地とルデシュ村への通勤者の居住域

ルデシュ村住民就業者の就業地	2011年	2021年
ルデシュ村内	291	318
ブルーデントツ行政管内	797	928
州内の他行政管区	420	559
オーストリア内他州	43	29
外国	115	114
合計	1666	1948

ルデシュ村への通勤者	2011年	2021年
ブルーデントツ行政管内からの通勤者	440	524
州内の他行政管区からの通勤者	140	223
オーストリア内他州からの通勤者	35	31
外国からの通勤者	0	0
合計	615	778

村外への通勤者数/村外からの通勤者数	2.236	2.095
--------------------	-------	-------

資料：Statistik Austria のホームページで „Ein Blick auf die Gemeinde“ と題するウェブサイトにある Erwerbstätige nach Entfernungskategorie des Berufspendelns と題する表。  
<https://www.statistik.at/blickgem/G0502/g80115.pdf> 2024年6月19日入手。

フェルトキルヒは都市であるがゆえに多様な雇用機会を擁しており、ルデシュからの通勤者が多いのは当然と言える。しかし他の3つ即ちネンツィング、ニュツィダス、テューリンゲンはレギオ・ヴァールガウを構成するゲマインデであり、ネンツィングにはノルウェーに本拠を置くアルミニウム製造の多国籍大企業ヒドゥロ社の子会社 Hydro Extrusion GmbH が1972年に<sup>7)</sup>、建築・土木用の機械を生産するスイスに本拠を置く多国籍大企業リープヘア社の子会社リープヘアヴェルク社 (Liebherr-Werk Nenzing GmbH) が1976年に立地し<sup>8)</sup>、テューリンゲンにはリヒテンシュタインに本拠を置く電動工具生産の多国籍大企業ヒルティ (Hilti) 社の工場が1970年に立地した<sup>9)</sup>。

ニュツィダスにラウフ社の工場が立地したのは1994年であり、これはある木材企業の移転に伴う敷地販売の情報を当時のラウフ社社長がた

またま入手して、急遽決断してそれを購入したことによっている<sup>10)</sup>。その後ラウフ社はその企業に隣接立地していた複数の企業が倒産するとそれらの土地を購入して (Vorarlberg ORFat 7.2.2006)、現在の工場規模に拡大した。それは、1987年以来レッドブル (Red Bull) 社のエナジードリンクレッドブルのボトリングを独占的に請け負っているラウフ社が、この清涼飲料水の販売急拡大に伴ってそのための専用工場を設立拡大するためだった<sup>11)</sup>。

ルデシュ村の概要に戻ろう。この村では農業が盛んである。とはいえ、Amt der Vorarlberger Landesregierung Landesstelle für Statistik (2023: 12) に掲載されている家畜を保有する農林業経営数の変化を示す表によれば、1974年の39戸から1990年の25戸、そして2020年の20戸に減少した。他方、上記統計書 (S.19) には、2020年の農林業専業経営体が14、兼業が13、共同経営な

いし法人経営が4、合計31経営体という表もある。また、飼料作物栽培経営体が19、野菜果物栽培経営体が5、農業共同経営体が1、混合栽培経営体ないし分類不能経営体が0、林業経営体が6、合計31とする表もある（上記統計書S.16）。農林業従事者の属性を示す表によれば、経営主以外で農業に従事する家族員が31経営体全体で72名、家族員以外の被雇用者が19名となっている（S.34）。したがって、山本（2024b）で紹介したヴァイラ村よりも農業が盛んな村である。実際、ルデシュ村全体で農業のための土地面積は725.38 haに上るので1経営体の農地面積は平均約23 ha強であり、ヴァイラ村の農家の経営規模の約2倍強の大きさである。農業用地のほとんどは牧草地で664.72 haに上る。耕地はその10分の1にも満たない56.54 ha、そして労働集約的な果樹や野菜などの特殊作物（Sonderkulturen）が4.12 haである（S.33）。ルデシュ村内で緑地帯

に位置するノイグートの農地ではディンケルムギやキャベツなどの野菜を栽培する農家がある。これは市民運動組織のホームページに掲載されている写真から分かるし、2022年10月に行なった筆者自身の現地観察に際しても野菜栽培農地があることを確認した。

ルデシュ村の第2次及び第3次産業の雇用で1事業所当り就業者数が多いのは交通業と製造業であるが、小規模である（表3）。しかし、ラウフ社にボトリングを委託しているレッドブル社の工場と、そのためのアルミ缶製造工場もある。

ルデシュ村は州内外からツーリストを呼び込むほどの観光地ではないが、村の中心としての機能を果たす村役場などの建物は著名な建築家でミュンヘン工科大学の建築学部教授を務めたこともある Prof. Hermann Kaufmann<sup>12)</sup> が経営する州内所在の建設企業 Hermann Kaufmann + Partner ZT GmbH が設計し、2005年に建設され

表3 ルデシュ村の産業別事業所数と就業者数 2021年

部門名	事業所数	就業者数	1事業所当り就業者数
製造業	23	448	19.5
エネルギー	2	3	1.5
上下水	1	9	9.0
建設業	20	96	4.8
商業	30	141	4.7
交通	3	68	22.7
宿泊・飲食	7	29	4.1
情報通信	9	10	1.1
金融保険	4	14	3.5
不動産	5	7	1.4
自由業	37	74	2.0
社会事業・公務	60	226	3.8
合計	201	1,125	5.6

資料：Arbeitsstätten nach ÖNACE-Abschnitten

<https://www.statistik.at/blickgem/G0603/g80115.pdf>

Beschäftigte in Arbeitsstätten nach ÖNACE-Abschnitten 6.8 Beschäftigte in Arbeitsstätten nach ÖNACE-Sektoren in Prozent

<https://www.statistik.at/blickgem/G0604/g80115.pdf>

いずれも2024年6月20日取得。

た。この木造建築になるパッシブハウス（写真1）があるので<sup>13)</sup>、視察が比較的多くなされてきた。ほかにも州内のあちこちにモダンな優れた木造建築物があるので、世界各地から建築家たちが視察にこの州を訪れるのである。例えば、日本からも徳島県神山町の一般社団法人「神山つなぐ公社」職員たちのグループが2018年にルデシュ村庁舎を視察した<sup>14)</sup>。このグループがルデシュ村を訪問したのは、優れた木造建築になるパッシブハウスである村庁舎及びバイオマスによる熱供給の実際を知るためだった。ルデシュ村は、e5という標語でオーストリアの地方自治体や州政府が推進しているエネルギー自律運動に早くから参加し、化石資源エネルギーに依存しない村づくりを指向した政治行政が展開されている<sup>15)</sup>。

### 3. フォラルベルクオーストリア放送協会の報道内容と市民運動

ルデシュ村における市民運動の具体を描く前に、Vorarlberg ORFat (3.5.2018) の報道内容を紹介しよう。ラインタール南部の市場町ランクヴァイル (Rankweil) に本社工場を置くラウフ社ニュツィダス工場と、ルデシュ村に立地するアルミニウム製品製造のアメリカ大企業ボール (Ball) 社の子会社とが、ルデシュ村の緑地帯での拡大を計画していることに対して、同州の自然保護オンブズマン (Naturschutzanwältin) のカタリーナ・リンス (Katharina Lins) が厳しく批判した。その工場拡大計画によって約6haの優良農地が失われるが、その計画を村当局と州政府が認めているというのである (写真2)。

ラウフ社はオーストリア国内だけでなく、少なくともドイツ語圏全体で名の知られたジュー



写真1 ルデシュ村中心としての役場などの建物

2022年10月15日筆者撮影 右側で長く伸びている木造建築物の2階が村庁舎となっており、1階にはレストラン・カフェ、図書館、ホールがある。これと直角に交差する位置にある別棟の木造建築物 (写真左手) には医療施設や保育所、セミナー室がある。写真には写っていないが、民間企業が入居する2階建て木造建築物もこの敷地の一面にある。これらの建物の前面では、開放感のある屋根があるので雨の日でも屋外での集会や催事の開催が可能であり、レストランのテラスもここにある。



写真2 ルデシュ村ノイグートの農地とラウフ社及びボール社の工場

2022年10月15日筆者撮影 中央奥の壁面が黒っぽくなっており上部が白い2棟とその間をつなぐ低層棟の建物がラウフ社工場、左手の小屋の背後にある白い壁面の低層建物がボール社工場。

スメーカーであるが、レッドブルのボトリングも行なっており、ボール社はそのためのアルミ缶を製造している。つまりボール社はラウフ社にとってのサプライヤーである<sup>16)</sup>。

ルデシュ村村長ディータ・ラウアマン (Dieter Lauermann) によれば、工場拡大は2018年時点で既に決まっていることだという。緑地帯を事業所用地にすることがルデシュ村の「空間的な発展コンセプト (räumliches Entwicklungskonzept)」において予定されていたからである。したがってルデシュ村は、緑地帯から約6haの土地除外を州政府に対して既に提案していた。この村にとっての地方自治体税の約半分はボール社や、同じく村内に立地しているレッドブル社事業所が納めているので、ラウフ社によるルデシュ村への工場拡大は村にとって大きな経済効果をもたらすと村長は見ている。州政府の経済担当閣僚であるカールハインツ・リュウディサ (Karlheinz Rüdiger) はその工場拡大計画を歓迎している。村の「空間的な発展コンセプト」は近辺の他ゲマインデを含むブルーメネク地域において認め

られているものなので、州政府としてルデシュ村の提案を承認する予定であるということもVorarlberg ORF.at (3.5.2018) は報道した。

しかし、カタリーナ・リンスは、当該の土地が農業にとって貴重であり、これを緑地帯から除外して工業用地とすることをもっと早くに阻止しなければならなかったであろうに、と言う。何故ならば高い価値を持つ農地の保全は空間計画の目的の一つだからであり、緑地帯からの一部土地の除外はその目的に反しているからである。

以上の内容からなるVorarlberg ORF.at (3.5.2018) の報道より前の2018年4月に、緑地帯への工場拡大計画を取りやめさせるための市民運動組織「生活の価値あるヴァールガウのためのイニチアティーヴェ・ルデシュ (Initiative Ludesch - für einen lebenswerten Walgau, 以下ILLWと略記)」は既に発足していた<sup>17)</sup>。その直接的契機が何であったかは筆者の調査不足の故に分からない。ただ、本稿の第5節で根拠をもって示すように、遅くとも既に2013~2015年にかけて村当局は緑地帯の削減を決めていた。しか

しその空間計画は必ずしも村民にとって周知のこととなっていたわけではなく、2018年春になってようやくラウフ社によるルデシュ村での工場拡大計画が村民の多くにとって知ることとなったと考えざるを得ない。そこで、緑地帯の削減を憂える人たちが、2016年末から2017年初夏まで州民全体を巻き込んだヴァイラ村での緑地帯削減計画を阻止する市民運動に触発されて、ルデシュ村だけでなくこれを含むヴァールガウ全体の問題として、ラウフ社とボール社の工場拡大計画を阻止するための市民運動を始めたと考えられる。その際に、後述するように ILLW の一員となっているヒルデガルト・ブルチャ (Hildegard Burtscher) がフォアールベルク自然保護委員会 (Vorarlberger Naturschutzrat) のメンバーであるがゆえに、その緑地帯削減計画をマスメディア報道よりも前に知ることができたと推定される。

### ILLW のホームページに記されている理念・目的・活動方針

注17) に記したウェブサイトには、ILLW に結集したルデシュ村やその近くのゲマインデに住む人たち17名 (男性9名、女性8名) の集合写真がある。その顔だちから高齢者ないしこれに近い年齢と思われる人も数名いるが、30歳台から50歳代の人たちが比較的多いと思われる。そのウェブサイトでの記述によれば、結集した人たちは多様性に富んでおり、ルデシュ村だけでなくヴァールガウ全体での生活空間を積極的に形成することに関心を持っているとのことである。ただし、ILLW はどの政党にも関係していないことが強調されている。

上記のウェブサイトには、この市民運動組織の理念と目的が記されている。その要点は以下

のようにまとめることができる。第1に、生活空間の形成は間接民主主義のもとで州政府やゲマインデ当局に委ねるのではなく、住民自身がその形成をめぐる議論に参加して合意を得て進められるべきである。そのためには十分な情報が公開されていなければならない。しかしルデシュ村とヴァールガウに関して政治家や村当局だけでなくメディアも情報を公開していないので、ILLW が回状 (Rundbrief) によって村民やヴァールガウの住民に対して、生活空間形成に関わる重要な情報を提供する。

第2に、ヴァールガウの発展はエコロジーと社会に対する責任をもってなされるべきである。具体的には、化学薬品に依存しない質の高い食品をできるだけ地域の中で自給することが望ましい。自然に適合した生産様式と生活様式を恒久化するのが重要だという考え方に基づいて ILLW は行動する。

第3に、単に金銭的利益の増加だけを目指す経済行動を否定する。経済的な発展を目指すのであれば、そのための用途に指定されている場所で、共同社会の利益 (gemeinschaftliche Interessen) を損ねないようになされるべきである。共同社会の利益とは、質の高い食料品を地域内で供給するための土台である土地と水の保全であり、構成員間の信頼に基づく社会的関係である。これらが生存の土台を成しているからである。土地は農民にとっての所得の基礎であり、食料品を地域内で供給できるようにするための前提条件である。ローカルな地域社会の中での生産と消費がうまくみ合うという意味での価値生産連鎖は、十分な土地がある場合にのみ可能である。

第4に、ILLW は他の様々な NGO や学問とネットワーク化されているフォアールベルク州規模のプラットフォームの構造に基づいて活動

する。気候変動がもたらす結果に警鐘を鳴らすためであり、科学的な認識に基づいた政治を求めるためである。

以上に示した ILLW の理念と目的の中で第 1、第 2 及び第 4 には活動方針も含まれている。そして理念を象徴的に表す標語は、ヴァールガウのエコロジー化 (Ökologisierung des Walgau)、社会的な責任を負う地域発展と対等性に基づく政治 (Sozial verantwortliche Regionalentwicklung und Politik auf Augenhöhe)、積極的な自然保護と気候公正的な行動 (Aktiver Naturschutz und klimagerechtes Agieren)、高品質な食料品の自給率の向上 (Erhöhung der Eigenversorgung mit qualitativ hochwertigen Lebensmitteln)、ヴァールガウのための環境公正的な生物資源戦略 (Eine umweltgerechte Bioressourcenstrategie für den Walgau) であることも同じウェブサイトの途中で明示されている。

### ILLW 回状第 1 号の内容

ILLW が回状第 1 号<sup>18)</sup> を村民やヴァールガウ地域住民に向けて発行したのは 2018 年 6 月のことである。その冒頭で、ILLW の目的がヴァールガウという地域を生活に値する場所にするにあり、この目的を毀損するのが、1977 年に州政府によって設定された緑地帯に属するルデシュ村域内ノイグート (Neugut) の土地からまず 6 ha、そしていずれ 16 ha もの土地を工場用地にする計画であるという趣旨のことが記されている。そう断定する根拠は示されていないものの、土地、地下水、農業、安全な食料品確保、地域の経済構造、交通・インフラ、市民参加の 7 項目に関して、ホームページでの ILLW 紹介文よりも分かりやすい文章で提示された。その概要は以下の通りである。

フォラーベルクの河谷平野の土地は用途転換の圧力にさらされてきた。ルデシュ村のノイグートもそうである。ここは特に肥沃度が高く、穀物と野菜の栽培に適している。工場による地下水利用はエコロジーと法的所有権という 2 つの論点に関係する。地下水が誰の所有になるかはオーストリア全国で議論されているが、ILLW は共通善 (Gemeingut) すなわち公共財であると考えている。ラウフ社工場は約 20 億 l の地下水を 1 年間に取水しているが、その利用料を全く払っていない。かつてフォラーベルクのサラダボール (Salatschüssel) と呼ばれたノイグートは、現在 5 戸強の専業農家によって利用されているが、その土地の用途転換がなされるならば農家の存続を危機に追いやることになる。質の高い食品を自給することは重要である。肥沃な土壌でならば有機栽培になるジャガイモを 1 ha あたり 2 万 5 千 kg 生産できる。6 ha の農地にラウフ社工場が拡大建設されたならば 100 人分の雇用が創出されるというが、それは誰もができる単純な仕事に従事するだけであって、質の高い職場が作られ、経済構造が高度化するというわけではない。しかも 1 人当たり 600m<sup>2</sup> もの土地利用は、雇用を生み出すための効率性として非常に低い。ウィーン工科大学の研究によれば、アイゼンシュタット (Eisenstadt) とその周囲ですら就業者 1 人当たり建築用地での使用面積は 100m<sup>2</sup> でしかない。2018 年時点での飲料生産は 1 日当たり約 2400 万缶に上る<sup>19)</sup>。工場が拡張されればそれは倍増し、結果として輸送のための交通量が増え、騒音や他の環境汚染物質の排出がもたらされるだろう。良好な生活環境の形成に住民も参加したいし、そのためには政治と経済における透明性が前提条件となる。

ILLW はルデシュ村の緑地帯に関する公共的な

議論を巻き起こすために、各種団体、即ち「オーバラント農業青年会 (Landjugend Oberland)」<sup>20)</sup>、「大地の自由 (Bodenfreiheit)」<sup>21)</sup>、「ルッツ川の友 (Freunde der Lutz)」<sup>22)</sup>、「生活空間ヴァイラ (Lebensraum Weiler)」<sup>23)</sup>、そして「自然保護委員会 (Vorarlberger Naturschutzrat)」<sup>24)</sup>と連携を取っていることも記された。

以上の ILLW ホームページ及び回状第1号の内容からすると、山本 (2024b、2024c) で紹介したラインタル及びヴァールガウで州政府によって設定されたゲマインデ横断的な緑地帯の3つの存在意義のうち、自然生態の保全と効率的な農業の土台が重視されており、住民にとっての近隣余暇保養即ち散歩やサイクリングにとっての意義は取り上げられていない。ヴァイラ村での緑地帯削減が問題になった際には自然の保全も重視されていたが、そこで取り上げられていなかった地下水の意義がルデシュ村でクローズアップされているという違いがある。そして、農業にとっての意義はヴァイラ村でもルデシュ村でも重視されていたとはいえ、ヴァイラ村では飼料作物しか栽培されていなかったの

に対して、ルデシュ村では穀物と野菜が栽培されており、しかも農民はルデシュ村民だけでなくテューリングン村民もいるというように、ヴァイラ村での状況と異なるルデシュ村ノイグート特有の状況があると分かる。

なお、ノイグートはその名称から推測できるように、農地としては比較的新しく開発された場所である。このことを筆者は2022年10月15日に現地を徒歩で観察した際に、写真3及び写真4にあるような開発の由来を書いた記念建造物で確認した。そこには次の文言が記されている。

「これらの耕牧区画地に神のご加護がありますように。1937年に森林から開発され、文化的な土地に転換し、そしてグスティン森林の購入に由来する債務の残りを完済して販売された。／市民共同体「シュトックローズング基金」管理のために。」

したがって、ルデシュ村ノイグートの農地の高い肥沃度は、森林から転換された後の約数十年間にわたる農業によって実現したと言えよう。もちろんその背景としてルッツ川とイル川の流



写真3 ルデシュ村ノイグートに立っているキリストの磔像

2022年10月15日筆者撮影。



写真4 キリスト磔像の台座に記された碑文

2022年10月15日筆者撮影。

れと関連した平野形成、そしてこの両河川や周囲の山岳地からの地下水流入によってヴァールガウ平坦部の地下での豊富な地下水貯蔵とがある。

#### 4. 市民運動組織の活動とルデシュ村ノイグートへの工場進出計画の問題点

##### ILLW による回状第2号<sup>25)</sup>の内容

ILLW による回状第2号以下の内容を簡潔に紹介する。第1号と同じ2018年6月に発行された第2号は、ルデシュ村ノイグートで農業を営んでいる農民たち（ルデシュ村民だけでなく、隣接するテューリンゲン村民も含む）が、そこへのラウフ社工場の拡大の故に存在を脅かされていること、そしてその農民たちが緑地帯削減に明確に反対していることを報じた。ルデシュ、テューリンゲン、ブルーデシュという3つのゲマインデのための「空間的な発展コンセプト」が地域民に提示された際の2014年5月に、ノイグートで農業を営んでいる農民たちはその土地の緑地帯としての維持という解決提案文書に署名したにも拘らず、結果的にそれが顧みられないで今日に至っているということがまず指摘されている。ILLW メンバーがその農民たちに直接会って聞き取りをしたところ、ルデシュでの農業の現状が判明したので、これを伝えるというのが回状第2号の趣旨である。もちろん、注18) で述べたように、ILLW メンバーの中に農民もいたので、聞き取り以前に既にルデシュの農業の状況についての情報は持っていたはずであるが、ILLW に関わっていない農民からの聞き取りも踏まえての回状第2号の執筆発行であると解釈できる。

ちなみに、上記の3つの基礎的地方自治体のための「空間的な発展コンセプト」とは Blumenegg

Räumliches Entwicklungskonzept 2013 Entwurf Bregenz, 3. 10. 2013. のことであり、この草案(Entwurf)は2013年10月7日に決定されたと Vorarlberg ORFat (7.10.2013) が報道した。そのコンセプトに対して2014年5月になってからノイグートでの農業に従事している農民たちがそこでの営農を維持したいと主張したのだから、ブルメネクにおける「空間的な発展コンセプト」は直接の利害関係者の意向を事前に確認することなく3つのゲマインデ議会で決定されたことになる。仮にそれを正式決定する前に3村民にコンセプトを開示して意見聴取の機会を設けたのだとしても、農民たちの意見は顧みられなかったと言わざるを得ない。そうした具体的な2013年夏頃から2014年5月にかけてのプロセスについて知るための資料を筆者は入手していないので確定的なことは言えない。それはともあれ、2018年夏時点でのルデシュ村での農業の実態は、ILLW 回状第2号によれば下記の通りである。

ルデシュでの農業は伝統的な農業、多様な作物を統合的に生産する農業、そして保証付きの有機栽培作物生産などさまざまである。野菜、穀物、牧草などさまざまな農産物が生産されている。野菜生産に特化する4ha規模の農業経営もあれば、穀物と飼料作物の両方を生産する30ha規模の農業経営にまでわたって様々な規模の農業経営があり、農地は自己所有の場合もあれば借地の場合もある。農民の多くは副業として農業生産に従事しているが、若い後継者がいる専業農家も5戸ある。1980年代にはフォアールベルクのサラダボールと呼ばれたほどに野菜生産が盛んで16戸の野菜生産専業農家があったが、2018年時点では3戸程度に減少している。その主たる理由は農産物価格の下落と農地の減

少であるが、借地の場合、その借地料はフォラールベルクの地代の高騰の故に高くなる傾向にある。ジャガイモ畑は約7haあり、この作物の州内自給に貢献しているゲマインデの筆頭がルデシュだとのことである。フォラールベルク全体でみるとジャガイモ畑は約45haあるが、州内自給率はわずか約6%でしかないという。

世界市場に農産物を供給するような農業と価格面で競争できる条件がルデシュの農業にはないが、土壌の豊度が非常に高いので、自然適合的な質の高い農産物の州内自給に貢献している。ノイグートの農地は2018年時点でその約70%が耕作に、残りが牧草に利用されている。耕作されているのはジャガイモ、ライムギ、スペルトコムギ（ディンケルムギ）、大麦、食用トウモロコシなどである。

ルデシュの農業は、質の高い農産物の生産をさらに進めることによってフォラールベルクの食料品自給率を高めることに貢献している。食料品自給率の向上は社会全体にとっての関心事である。タマネギ、ニンジン、パースニップ、キャベツなど貯蔵可能な野菜の生産に意欲的な農民もいる。ただしこうした作物生産のためには3～4年単位での輪作を必要とするし、そのためには十分な広さの農地を必要とする。

州政府自身、自給率の向上と農業、とりわけ食料品生産のための土地の確保とを「エコラント2020戦略」の重点としている。フォラールベルクのオーバーラントにある最良の耕地を緑地帯から除外するというのはばかげたことだ。中期的には16haもの耕地がその危険にさらされている。

以上のようにILLWは回状第2号でルデシュ村ノイグートを緑地帯として維持することによる農地の保全を訴えている。

## 村・州・市民などの反応

回状発行によってルデシュ村ノイグートの農業にとって緑地帯がもつ意義を訴えるだけでなく、ILLWは2018年7月12日にルデシュ村庁舎のホールで、「土地と安全な食料品確保」に関する講演会を開催した。講演者は地域計画を専門とするウィーン土地文化大学（Universität für Bodenkultur Wien）教授であり、フォラールベルク自然保護委員会委員長のゲルリント・ヴェーバー（Prof. Dr. Gerlind Weber）と「オーストリア山地小農民同盟（ÖBV: Österreichische Berg- und Kleinbäuer\_innen Vereinigung）」会員のシュテファン・シャルトルミュラ（Stefan Schartlmüller）だった。講演会の写真をみると、約100名が椅子に腰かけて聴取できるホールは満員となっており、盛況だったことがうかがわれる<sup>26)</sup>。

この講演会に先立ってVorarlberg ORFat (6.7.2018)は、ルデシュ村の農民たちがノイグートへの工場拡張計画に明確に反対すべく立ち上がったと報道した。州政府が政策方針として掲げたエコラント戦略、即ち地域での野菜生産を増やすという戦略に明確に背くものであると農民たちは批判し、ILLWに合流したというのである。農民たちを合流したILLWの目標は住民投票の実施であり、ルデシュ村の農業を政治家たちだけの決定に委ねるのではなく、直接民主主義によって決定することを重視しているという。既にこの企てに600名が賛同署名しているという。それに対してルデシュ村村長ラウアマンは、「空間的なコンセプト」で農業のための土地は十分に確保されているし、農業と工業とがパートナーシップを発揮することを重視し、農地として利用されている土地に工場が建てられた場合、そのビルの屋上での農業も可能であると考えているとのことである（Vorarlberg ORFat

6.7.2018)。

州政府の担当閣僚であるリューディサ副首相は、農民が豊度の高い農地で営農を継続したいと考えていることに理解を示しながらも、州全体が経済的に発展することも重要であり、仮に経済的に成功している企業がさらに成長するために土地を必要とするのであれば、州政府はそのために必要な土地を予備地から提供すべきとORFのラジオ放送で語ったとのことである。ラウフ社とボール社が現在地で生産拡大するためには、オーストリア鉄道とアウトバーンへのアクセスの便宜からしてルデシュでの工場拡張が望ましいし、その決定はゲマインデが行なうことであり、2018年末になされるであろうと述べたという (Vorarlberg OREat 6.7.2018)。

2018年8月29日には、ルデシュ村中心部からノイグートまで、ルデシュの土地と地下水の保全を訴えるプラカードや横断幕を掲げて、ノイグートの土地用途転換に反対する人たち約600名が参加するデモ行進が行われた(写真5)<sup>27)</sup>。このデモはルデシュ村ノイグートをめぐる問題だ

けに焦点を当てたものではなく、2010年代に顕著になっていたフォアールベルク州の緑地帯への企業による絶えざる蚕食を容認する州政府の土地政策に抗議するとともに、気候変動やマストリーズムによる自然破壊の進展に対して一般市民の関心を高めるために4つの団体<sup>28)</sup>が中心となって企画した8月27日(月)から8月31日(金)までの5日間にわたって州最北部のボーデン湖沿岸プレーゲンツから州最南部のジルヴェッタ (Sylvretta) 山塊の高所ビーラハーエ (Bielerhöhe) まで約96kmを徒歩で行進するデモンストレーションの一環として行われた (VOL. at 21.8.2018)。その徒歩での行進の全日程に参加した人はアルプス保全協会の会長 (Alpenschutzvereinsobmann) のフランツ・シュトゥレーレ (Franz Ströhle) ただ1人だけだったこと、最終日に参加した人数は約40名に留まったことなどが、注28)に記した自然保護連盟のウェブサイトに記載されているが、そこには特にルデシュでのデモ行進に参加した人が約600名に上ったことも記されており、全日程の中で



写真5 ルデシュ村でのデモ行進

2018年8月29日 緑地帯への工場拡大を企図した飲料大企業ラウフ社に抗議する市民たち。

出所：Was bisher geschah. Die Geschichte unserer Auseinandersetzung mit allen Aspekten der geplanten Erweiterung der Getränkeindustrie in Ludesch (Ball, Rauch, Red Bull) hat ein neues Kapitel bekommen:

<https://www.initiativeludesch.at/> 2022年8月22日取得。

これが1つのハイライトをなしたと分かる。別言すれば、ルデシュのデモに参加したのは村民だけではなく、フォアールベルク州の緑地帯への工場進出を問題視する他のゲマインデに住む市民も多くいたのである。

### ILLW による回状第3号<sup>29)</sup>の内容

2018年10月に発行された第3号は、ノイグートの土壤がもつ生態的並びに経済的な価値を詳しく述べるものだった。土壤は水分を貯蔵する機能を持ち、それによって洪水を和らげる働きをする。またCO<sub>2</sub>を貯蔵する機能もあり、これによって地球温暖化の進展を緩和する働きもする。土壤は各種の栄養素を貯蔵する機能を持ち、それによって人の生命を維持するための農産物生産が可能になる。フィルターの機能を持つ土壤のおかげで質の高い飲料水も得られる。ノイグートの土壤は特に農業に適しており、その状態になるために数千年もの年月を要した。そのような土壤が建造物で覆われればヒートアイランドその他の微気候が不適切なものとなり得る。雇用機会を増やすとか地方自治体税収入を増やすという理由で肥沃な土地を農業から取り上げるのは間違っている。概略、以上のような趣旨だった。なお前述したように、ノイグートが農地として利用されるようになったのは1930年代以降のことであるが、そのための自然生態の働きを重視して数千年と記したのである。

### ILLW による回状第4号<sup>30)</sup>の内容

第3号と同月に発行された第4号は、8月末のデモについて簡潔に書いたうえで、地下水の機能について詳述している。オーストリアの法律では土地所有者がその地下にある水を、近隣の地下水利用者には害を及ぼさない限り無料で利

用できることになっているので、ラウフ社は非常な低コストでレッドブルのボトリングをしている。地下水を公共財と位置づけ、これを利用する企業に対して使用料支払い義務を課しているドイツのザクセン州の事例に回状は触れて、地下水利用に関するオーストリアの現状を問題視している。そこでは1m<sup>3</sup>の地下水利用につき0.076ユーロの使用料支払い義務が課されており、仮にこれをヴァールガウに立地するラウフ社に適用すれば、1年間に239万ユーロの地下水使用料を同社は払わなければならないであろうという試算が示されている<sup>31)</sup>。オーストリアでも1959年の水利法で地下水を公共財(Gemeingut)と位置づけているが、これに追加条項を加えるべきだというのである。商取引財としてあるいは無料で利用できる資源としてではなく、基本的な権利・人権に関わる資源として水を扱うべきだというのである。このことは、EUがオーストリア国家に対して2015年の環境点検報告でも提案していることだという。

ヴァールガウの地下水は非常に豊富であり、その水質も優れている。レッドブル社とラウフ社がヴァールガウに立地したのは良質で豊富な地下水を無料で取水できるからであるが、ヴァールガウでの地下水の水位は、その利用が企業や住民によって進んだために下がり、結果として土壤の乾燥化につながり、植生や農業にも影響を及ぼしていると記されている。さらに、ILLWとして、この問題に関する州政府の環境担当閣僚と農業担当閣僚ないしはそれらの部局、ヴァールガウ地域の村長たちを招いての円卓会議を開催したいと申し出たが、村長たちの中にそれに応じられないという人がいたので、公共の場での議論ができないでいるということも記されている。

## ILLWによる回状第5号<sup>32)</sup>の内容

2018年11月に発行された第5号は、その冒頭で、秋雨の降る日に緑地帯への工場拡張計画に反対する市民集会在ノイグートで開催された様子を写真で示している。そして、土地用途指定の転換は既に決まったことであると聞かされることが多かったが、それは誤っているという趣旨の冒頭の一文に続いて、この間に明らかになった事実と今後の見通し、そして運動の進め方が2頁にわたって詳述された。その概要は以下の通りである。

そもそも2015年に決定された「空間的な発展コンセプト ルデシュ2015 (*Räumliches Entwicklungskonzept Ludesch 2015* gemäß Gemeindevertretungsbeschluss vom 18. 6. 2015)」がノイグートを「事業所用地2」と用途指定するのは、州の緑地帯に関する州空間計画の権限に反している。これによれば緑地帯に何らかの建築物を設置するためには、「特別オープンスペース」として指定されている場合のみである。仮にノイグートを「事業所用地」と指定するのであれば、その前に当該の土地を緑地帯から除外決定しなければならない。確かにルデシュ村当局は州政府に1年以上前にノイグートの緑地帯からの除外を申請したが、これはまだ決定されていない。

緑地帯に含まれている土地をそこから除外するためには、州政府の中のいくつかの部署がそれぞれの立場からの見解を削除提案に対して文書で示す必要がある。州政府閣僚の中で経済と空間計画を担当している副首相のリュエディサはその各部署の見解を慎重に考慮する義務があり、その熟慮の結果を「環境説明報告書 (Umwelt- und Erläuterungsbericht)」としてまとめることになっている。これは2018年9月末ま

でにまとめられて公表することになっていたとリュエディサ自身が述べている。しかし、まだ公表されていない。

「環境説明報告書」が公表されるならば、この事案に関わるゲマインデの市民に対して開示され、各市民はその報告書に対する意見書を提出する機会が設けられる。提出された意見書は取りまとめられて「環境説明報告書」とともに、「空間計画諮問委員会 (Raumplanungsbeirat)」に提出されることになっている。それは2019年2月または3月になされるであろう。空間計画諮問委員会の審議を経たならば州政府としての決定がなされる。政府の決定は州議会の同意を得なければならない。それは2019年4月ないし5月ということになるだろう。州議会がノイグートを緑地帯から除外すると決定したならば、これがルデシュ村に伝達される。そのうえで初めてルデシュ村として、その除外された土地の用途指定の議案を提起できる。その後ラウフ社が工場建設に取りかかることができることになる。こうした手続きが2018年11月時点で完了していなかったのだから、まだノイグートを緑地帯に留めておくことが可能である、とILLWは主張したのである。

以上のような予想されるルデシュ村と州政府によるノイグートの土地の扱いに対して、ILLWは次のような対応を考えていることが記されている。

1. 「説明・環境報告書」が開示された場合のILLWとしての意見表明文書の準備。
2. ILLWの更なるネットワークとそのためのホームページの作成。
3. ILLWのプロジェクトを周知するためのイベント。
4. ラウフ社工場見学（これについては既に了

解を得ている)。

5. 空間計画諮問委員会委員と州議会各党派への手紙の発送。

6. ルデシュからブレーゲンツまでのデモ行進と州政府庁舎前でのデモ集会。

仮に地域とゲマインデの政治に責任を持つ人たちが、この案件に関するすべての根拠を示した議論と市民の抗議を無視するならば、政治にとって義務となる住民投票をルデシュで行なうべく努めることになる。

以上の法的プロセスの説明と運動展開の方針の記述のあとで、回状第5号ではさらに、レギオ・ヴァールガウの代表者と ILLW の代表者が会見し、ヴァールガウの生活空間を改善するための建設的な意見交換ができたことも記された。

単にノイグートの用途指定転換に反対するだけでなく、ヴァールガウの自然生態の改善、社会的な地域の発展、気候変動を緩和するための行動、政治面での同等の関係を市民と政治家との間で構築することなどが、ILLW の活動の積極的な目的であることも回状第5号で謳われている。そして当面の重点は、単にルデシュのためだけでなく、ヴァールガウのための自然保護、自然生態を十二分に配慮した生産方法、そして有機資源戦略であるとしている。

### ILLW による回状第6号<sup>33)</sup>の内容

2019年1月に発行された回状第6号では、ルデシュ村ノイグートにラウフ社工場とボール社アルミニウム缶製造工場とが拡張建設された場合の経済的な利害に関する ILLW 単りの考察が提示された。その要点は次の通りである。第1に、経営的に良いとされることのすべてが世界の進歩にとって良いとは限らない。第2に、土

地は増やすことができない資源なので仮に工場が建設された場合には地域特有の食料生産が犠牲になる。第3に、土地と地下水を企業が大量に利用してもそれに対応する見返りがルデシュ村にはあまり入ってこないし、他の関係自治体にはほとんど入らない。第4に、意欲的な地元企業の中にはルデシュ村からよそへ移転するという事実もあるのに、子や孫たちが質の高い働く場を手工業やその他の事業に見出すことのできる企業はどこに立地することになるのか。以上の主張や疑問が提示されたのである。

レッドブルをボトルングする工場とそのためアルミ缶製造工場とをノイグートで拡張するのはこの立地条件が好適だからという見解があるが、それは大企業にとって良いことであっても、住民にとって良いことではない、と ILLW は主張しているのである。また、地域の経済構造として望ましいのはイノベティブな企業が様々な産業部門にわたって存在していることであって、そうすれば経済危機にさらされにくい、少数の大企業に依存する経済構造は脆弱であるという当然の指摘も回状第6号でなされた。とはいえ、この指摘がルデシュ村というスケールの場所にあてはまるとは言い難い。多様な産業部門にわたるイノベティブな企業の併存はフォラールベルクというスケールの地域で実現されていることは山本(2024a)で明らかにしているが、その内部における部分地域で実現するのか、実現するためにはどの程度の人口と面積があれば可能となるのか、こうした問題を考察することも必要だが、回状第6号にそうした問題関心を認めることができない。

それはともかくとして、ILLW はルデシュ村民やヴァールガウ地域民に対して、住民投票を通じて自身の意見を強く表明する機会を持つこ

とになるだろう、と回状第6号の文章を結んだ。

## 5. 2015年に決定されたルデシュ村の「空間的な発展コンセプト」

州政府が設定した緑地帯に含まれているノイグートの土地をルデシュ村当局がどのように扱おうとしたのか、これに関する公文書は前述した2015年6月18日にルデシュ村議会が決定した「空間的な発展コンセプト ルデシュ2015」である。これには、ブルーメネク地域の東部がニュツィダス村の工場地区に隣接しており、オーストリア鉄道のルデシュ駅もあるので、商工業立地の場所としてさらに開発されるならば、ブルーメネク地域に属する村々の価値創造と労働市場に寄与すると明記されている。ただし、そのためにはゲマインデ間の協力が必要であり、それには Region Walgau (ママ、Regio Walgau と記すべきだったと推測される) や州政府と協力して形成される地域的な規則と手段が必要であるとも記されている (*Räumliches Entwicklungskonzept Ludesch 2015 gemäß Gemeindevertretungsbeschluss vom 18.6.2015, S.8*)。そして、ノイグートという場所は州政府が1977年に設定した緑地帯の一部となっているが、集落縁辺部にあるのでルデシュ村の土地用途指定を将来変更することを暗示するとともに、その代替として新たに緑地帯に組み入れるべき場所として丘陵斜面を緑色の線で囲むという地図(地図のタイトルは *Erweiterung der Landesgrünzone*) が17頁目に付されている。ただしその代替地はルデシュ村の領域内ではなく、ブルーデシュ村の領域内にあり、しかも明らかに斜面地である。この地図の下にある本文には次の意味の文章がある。

「河谷平野の土地では、漸次的かつ計画的な集落の発展のための自由のできる空間が点検され、開かれる。目論まれている、内側から外側に向けての発展を確実にするためには、3つの発展段階が補足的に定義される。」(S.17)。

そして、その3つの段階の詳細に関する文章が17~19頁目で示されている。それは結局のところ、土地用途指定の転換のための条件を提示する内容となっている。その最後に、新しい土地用途指定の下で、ノイグートの大部分を「事業所用地2 (Betriebsgebiet 2)」と指定する地図が19頁目に提示されている。その面積は、後で紹介するラウフ社とポール社が求める工場拡大のための敷地面積6.5 ha を大きく上回っている。それ故、いずれノイグートの農地約16 ha が事業所用地となり、それがラウフ社の工場拡大のために利用される、と ILLW は判断したと言える。

ちなみに「空間的な発展コンセプト ルデシュ2015」は2013年に決定されたブルーメネク地域の「空間的な発展コンセプト」に基づいて策定されたものである (*Vorarlberg ORFat 7.10.2013*)。これにはブルーメネク地域における事業所用地の開発地として地域西部のアウトバーン14号線のネットワーキングインターチェンジに近い場所と、東部のルデシュ駅及び隣村ニュツィダスの工場用地に近い場所とがあり、この2つの事業所用地で地域における価値創造と労働市場への貢献が期待されるという趣旨の文章が記されている (*Blumenegg Räumliches Entwicklungskonzept 2013, S.8*)。但しそのためには、ゲマインデ間の協力が必要であり、ヴァールガウ地域と州とともに形成されるルールと手段を必要とするとも記されている。ルデシュ駅及びニュツィダスの工場用地に近い場所とはノイグートにほかならない。

そしてこのブルーメネク地域の「空間的な発

展コンセプト」の17頁目には、3つの村それぞれにおいて2013年時点で緑地帯に含まれている場所が将来的に住宅用地や工場用地に転換された場合、それらの補償としてブルーデシュ村の斜面地が緑地帯に組み入れられる予定であることを示す地図が提示されている（図3）。

そして州政府空間計画局が2018年7月24日時点でのブルメネク地域の3か村における緑地帯から削除すべき土地とそれに組み入れる土地に関して作成した一覧表がある<sup>34</sup>。これによれば、ルデシュ村に位置する緑地帯から今後除外されるべき土地10区画の合計が16.753 haに上っ

ている。緑地帯に既に組み入れられた土地はブルーデシュ村にしかなく、その面積は38.03 haに上っている。

上の図とほぼ同じ図が、2015年6月18日にルデシュ村議会が決定した「空間的な発展コンセプト ルデシュ2015」の17頁目に掲載されているし、19頁目にはノイグートの大部分を「事業所用地2」と位置付ける地図が、さらに38頁目にはその拡大図（図4）が掲載されている。

つまり、ルデシュ村ノイグートを工場用地に転換する考えは遅くとも2013年に確立していたし、3つの村の村長や議会によって合意されて

### Flächenabtausch Landesgrünzone

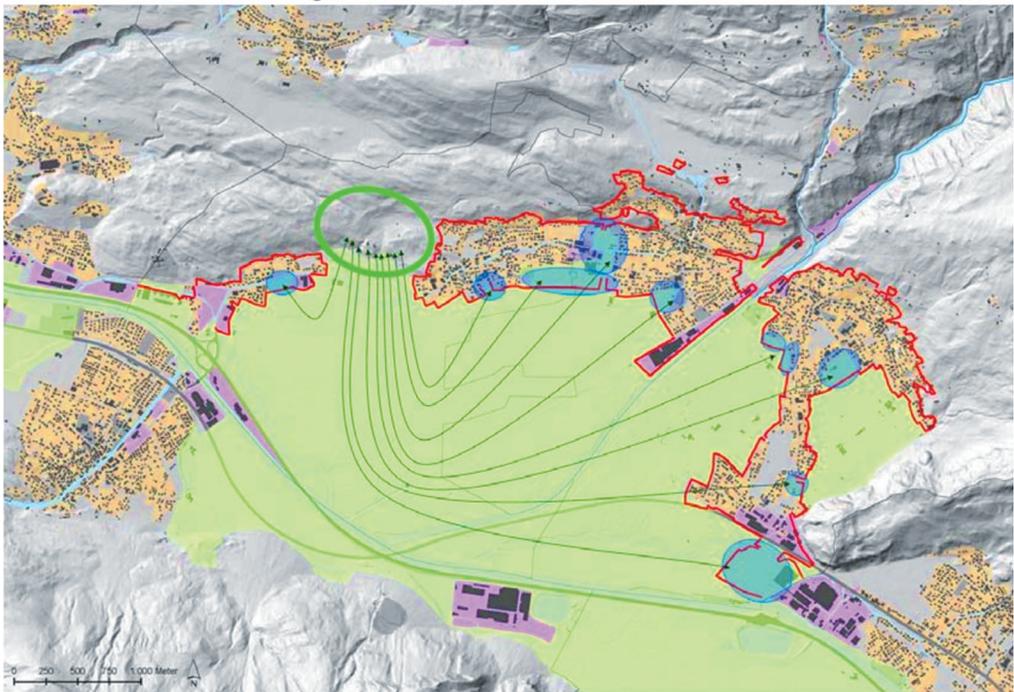


図3 ヴァールガウのブルメネク地域における緑地帯からの削除予定地区とその代替地区に関する計画図（原図はカラー印刷）

9本の矢印曲線の発地が緑地帯からの削除予定地であり、矢印の向かう先が、それらの代替地として緑地帯に組み入れるとされている斜面地である。ルデシュ村内の緑地帯ですでに建設可能となっている場所と将来的にそうする場所とは、この図の右の太線内にある。ノイグートはその最南部に位置し、緑地帯であるにも拘らずボール社工場が既に存在していることを、薄い灰色の四角形が描かれていることから分かる。その右隣にラウプ社工場があり、黒色で示されている。この工場はニュツィダス村の領域に位置している。

出所：Blumeneck Räumliches Entwicklungskonzept 2013 Entwurf, 3. 10. 2013, S.17.

**Regionaler Betriebsstandort Blumenegg-Ost (Ludesch + Nüziders)**

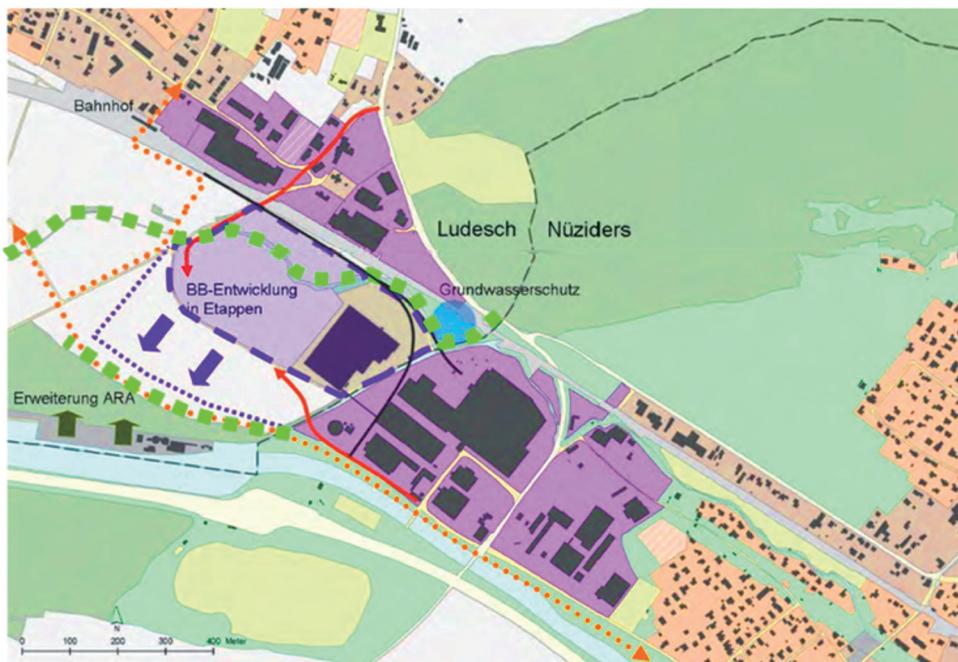


図4 ニュツィダス村の工場用地と接するブルーメネク地域東部の事業用地 2015年時点 (原図はカラー印刷)

ニュツィダス村域内にあるひととき大きな建物がラウフ社工場。左上に Bahnhof という文字がある辺りから南東方向に鉄道路線が走っており、その上側の比較的大きな建物2棟がレッドブル社の工場。ボール社工場はラウフ社工場の北西に位置し、その左にブルーメネク地域の事業所地区が段階的に発展するという意味のドイツ語が記され、矢印も描かれている。2018年に問題視されたラウフ社とボール社の工場拡大のための6.5 haの土地は、段階的發展が見込まれている事業用地の一部でしかない。ノイグートで16haの土地がラウフ社の工場拡大のために使われるであろうと ILLW が回状第1号で述べた根拠は、この図にあると推定される。

出所：Räumliches Entwicklungskonzept Ludesch 2015 gemäß Gemeindevertretungsbeschluss vom 18. 6. 2015, S.38.

いたと言わざるを得ない。これを傍証するのがルデシュ駅の増改修である (Vorarlberg ORF.at 13.2.2014)。この報道ではラウフ社がニュツィダスにある工場だけではレッドブルの増産に対応できないので隣のルデシュ村ノイグートに工場を増設すると明確に書いているわけではないが、ルデシュ村の副村長がルデシュでの就業者数の増加を期待し喜んでいるということが記されていた。それは、ルデシュ駅の東側でレッドブルの原液を生産しているレッドブル社工場から

ニュツィダスにあるラウフ社工場に輸送するのに、ルデシュ駅での貨物列車用線路の増設によってはるかに便利になり輸送費削減に寄与するという趣旨の記事であるが、ラウフ社の将来におけるルデシュ村領域内での工場増設を暗示していたのである。

そもそもレッドブルの原液生産工場がルデシュに立地したのは2009年夏のことである<sup>35)</sup>。Vorarlberg ORF.at (7.12.2009) もレッドブル社工場の立地を報道するとともに、17名の従業員が

レッドブル社工場で働いていること、いずれ21名に増えること、レッドブルの原材料は鉄道で運ばれてきてルデシュ工場で原液に加工され、これがトラックでラウフ社工場に輸送され、レグザム社（当時、現在はボール社）の工場で生産されるアルミ缶にボトリングされると報道した<sup>36)</sup>。なお前述したように、ラウフ社がニュツィダスに工場を設立したのは1994年のことであり、レッドブルのボトリングを手掛けるようになったのは、レッドブル社が1987年にスタートした当初からだった。

またやはり前述したように、既述の3か村から構成されるブルーメネク地域は、より広域のヴァールガウ地域の一部である。ヴァールガウ地域というスケール・レベルの地域でも「空間的な発展コンセプト (*Räumliches Entwicklungskonzept Walgau (REK Walgau) Regionale Grundsätze und Ziele der räumlichen Entwicklung im Walgau*)」が作成され、2014年9月18日に公開されていた。これにはヴァールガウのどこに州政府が設定した緑地帯があり、どこに既存の事業用地があるかを示す地図は掲載されておらず、誰もが賛同するような原則のみを記した文章だけから構成されている。しかし、その12頁目には第2章として「経済空間に関する地域的な諸原則と諸目的」が設けられ、その第2節が「場所の発展、事業所の育成、事業所の立地を重要課題として認識 Standortentwicklung, Betriebspflege und Betriebsansiedlung als wichtige Aufgaben wahrnehmen」と題されて、ヴァールガウ地域全体として雇用機会を拡大する事業所立地を進めるという原則が述べられている。その場所として望ましいのは、アウトバーンに近く居住集落から離れたところであるということも記されている。

ルデシュ村ノイグートはまさしくそういう場

所である。アウトバーンの最寄りインターチェンジは隣村のニュツィダスにあるし、最寄りの居住集落はオーストリア鉄道を挟んでこれの北側にあるので十分離れており、しかもルデシュ駅は貨物列車の停車が旅客列車の比較的頻繁な運行を妨げないように2015年末までに改修されること が 確 実 とな り (Vorarlberg ORFat 13.2.2014)、 実 際 に 改 修 さ れ た か ら である (Vorarlberg ORFat 11.12.2015)。改修完成式にはオーストリア鉄道代表者、ヴァルナ (Wallner) 州首相、ルデシュ村村長ラウアマンと並んでラウフ社を代表してユルゲン・ラウフ (Jürgen Rauch)、レッドブル社を代表してローラント・コンチン (Roland Concini) が並んでテープカットに臨む写真が付されていた。

そして、2015年にはルデシュ村だけでなく、ブルーデシュ村、テューリンゲン村でも、2013年のブルーメネク全体にとっての「空間的な発展コンセプト」とヴァールガウ地域全体の「空間的な発展コンセプト」を受けて、各村独自の「空間的な発展コンセプト」が策定された。前述したように、これら3つの村は、それぞれの領域内にある州政府設定になる緑地帯の一部を削減し、その補償としてブルーデシュ村の斜面地にある土地を共同で州緑地帯に組み入れるという決定をしていた。それを踏まえて3か村は州政府空間計画局に対して、緑地帯の一部削減と、その補償措置としてのブルーデシュ村領域に属する斜面地の緑地帯への組み入れを2017年には申請していたのである。

以上みたように、ルデシュ村当局は2013年から2015年にかけてノイグートの緑地帯を事業所用途地域に変更するための決定をブルーメネク地域とルデシュ村の2つの政治的行政的レベルで決定したと言えるが、このことを傍証する記

事が *Vorarlberger Nachrichten* (30.10.2014) に掲載された。この記事の冒頭で、ルデシュ村に立地するレッドブル社とレグザム社の例を挙げて、同紙は雇用機会と税収の増大という恩恵を受けるゲマインデ経済がブームの状況にあるとして、ルデシュ村のラウアマン村長へのインタビュー結果を紹介した。そのインタビューの中で、村の財政状況と、これに関わってのさらなる事業立地の計画があるかという質問に対して、やや曖昧ではあるが、以下のようにラウアマン村長は答えた。

ルデシュ村は住宅建設、洪水対策、上水供給、用水路などのための投資をここ数年間積極的に行なってきた。村財政の健全化のために500万ユーロの債務削減も実現した。しかし今後は、乳幼児や小学校のための施設整備を進めなければならないが、それには1500万～1600万ユーロ必要となるが、そのための財源を持っていない。その財源を確保するためということもあってというニュアンスで、村は「空間的な発展コンセプト」を練り上げてきたとラウアマン村長は述べた。そして、レッドブル社やラウフ社の周りで活動する事業所などから、村の地方自治体税の約50%を得ており、これらの企業が立地している場所で、更なる事業所拡大のための可能性がある、とも述べたのである。

「レッドブル社やラウフ社の周りで活動する事業所など *Umfeldbetriebe von Red Bull und Rauch*」という表現をラウアマン村長はしているが、これはレグザム社のことを意味していると言わざるを得ないし、ルデシュ村に立地してレッドブルの生産に関わって活動している企業は、ほかにレッドブル社の工場しかない。そしてラウフ社はレグザム社工場と隣接して立地しているが、その敷地はルデシュ村ではなくニュツィダス村

内にあるし、レッドブル社の事業所は鉄道線路を挟んでレグザム社の北西に位置しているのである。

要するに、ブルーメネク地域3か村全体の「空間的な発展コンセプト」が策定された時には既に、つまり2013年10月にはルデシュ村でのレッドブル生産拡大のための工場用地としてノイグートの農業用地を緑地帯から事業所用地に転換することをラウアマン村長は企図していたと言わざるを得ない。

## 6. おわりに代えて（中間的結論）

フォアールベルク州政府設定になるゲマインデ横断的な広大な緑地帯の一部に工場拡大を企図した飲料大企業ラウフ社に対して、その計画を阻止するためにヴァールガウのルデシュ村で2018年に発生した市民運動は、2016年から2017年にかけてヴァイラ村で発生した市民運動とその意図において同じである。しかし、ヴァイラ村では村当局の決定に対する抗議であり工場建設を企図した企業を批判したわけではないのに対して、ルデシュ村での市民運動は工場拡大を企図した企業、特にラウフ社に抗議するものであった。また、運動の中心に農民がいたという点でも、ヴァイラ村での市民運動と異なっている。

ルデシュ村当局は、遅くとも2013年10月にはラウフ社の工場拡大を可能とするための空間計画策定を決意していた。決定したのは形式的には2015年6月である。その決定前にテューリンゲン村及びブルーデシュ村と共同で策定したブルーメネク地域の「空間的な発展コンセプト」が2013年末から2014年初めにかけて地域民に開示され、意見を求めた可能性がある。

ルデシュ村で農業に携わる農民の中には遅く

とも2014年に優良農地を緑地帯から除外することに反対の声をあげる者がいた。しかし村当局や州政府はその声を聞き入れなかった。政治的決定権限を持つ政治家たちは、自然保護や地産地消のための高品質農産物の生産に貢献する優良農地を緑地帯として維持することよりも、州や村の税収増と雇用拡大に寄与する工場拡大をより重視していたからである。そこで農民たちは州内の農業団体や自然保護団体と連携し、ローカルな空間スケールの中での優良農産物の地産地消や生態系及び水資源の保全と、グローバルイシューである地球温暖化抑制をローカルな場で実践することの重要性を主張して、緑地帯削減を阻止するための運動を展開した。そして、農民たちの声を聴く耳のない政治家たちによる政治的決定を覆すためには住民投票によるしかないという考えを早くから持ち、大規模なデモ行進を各種団体と連携して実行するとともに、住民投票を実現させた場合に農民たちの主張が理の通ることであることを村民に知らせるための情報提供活動を地道に続けた。

ルデシュ村での市民運動が住民投票実施につながったか否か、そしてそれが市民運動側の期待通りの結果を得たか否か、この問題は別稿で詳細に論ずる予定である。オーストリア、そしてその一州であるフォラルベルクの民主主義と持続可能な発展との関係を考察するために必要な作業だからである。

付記：本稿の骨子は2022年11月20日に佛教大学紫野キャンパスで開催された人文地理学会大会において、「生産拡大のための土地を望む企業に抗する市民運動—オーストリアの豊かな農村の地域における現実の側面—」という標題で発表した内容の一部である。本稿は2019～24年度に日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(一般)の助成を得て実

施している「エコ社会的市場経済原則の下での「場所に関する戦略的経営」の経済地理学的研究」(課題番号19K01191)による研究成果の一部である。

## 注

- 1) ラウフ社については山本(2024a: 262-269)で詳述したので参照されたい。ちなみに同社はオーストリア最大のジュースメーカーであり、筆者が2016年7月から9月までの3か月間、ハイデルベルク大学で在外研究を行っていた際に利用したスーパーマーケットにおいて各種ジュースを配置している棚で最も目立つ場所に最もたくさん置かれていたジュースのメーカーでもある。この経験から推測すると、ドイツ語圏で最も成功しているジュースメーカーであろう。しかし同社はジュースだけでなく、レッドブルというエナジードリンクのボトリングも行っているレッドブル社にとってのOEM供給企業でもある。このことも上記の拙著で指摘しておいた。
- 2) <https://www.imwalgau.at/> 2024年6月19日閲覧。
- 3) <https://www.imwalgau.at/ueber-uns/was-ist-regio-im-walgau.html> 2022年8月3日閲覧。
- 4) <https://www.dk-rb.at/burgruine-blumeneegg/> 2024年6月19日閲覧。なお、グローセスヴァルザータールはヴァールガウの北東に位置する山岳地域である。
- 5) [https://www.ludesch.at/Leben\\_in\\_Ludesch/Wissenswertes/Zahlen\\_Fakten](https://www.ludesch.at/Leben_in_Ludesch/Wissenswertes/Zahlen_Fakten) 2024年6月19日閲覧。
- 6) Abgestimmte Erwerbsstatistik 2020 - Erwerbsspendler/-innen nach Pendelziel <https://www.statistik.at/blickgem/ae3/g80115.pdf> 2024年6月19日入手。
- 7) <https://www.hydro.com/nenzing> 2024年6月19日閲覧。
- 8) リープヘアヴェルク社については山本(2024a: 197-207)で詳述したので参照されたい。
- 9) ヒルティ社テューリンゲン事業所については山本(2024a: 314-321)で詳述したので参照されたい。
- 10) ラウフ社ホームページの”Der Zufall bringt Rauch zum neuen Werk in Nüziders”という標題でのウェブサ

- イトによる <https://www.rauch.cc/de/unternehmen/100-x-rauch-1919-2019/posts-de/wo-weiter-wachsen/> 2024年6月28日閲覧。
- 11) オーストリアの企業を紹介するホームページ trend における "Rauch Unternehmensprofile" という 標題でのウェブサイトによる <https://www.trend.at/unternehmensprofile/rauch-fruchtsaefte#firmengeschichte-ein-fruchtsaft-familienimperium> 2024年6月19日閲覧。ちなみにラウフ社は、スイスのザンクトガレン州ヴィトナウ (Widnau) に子会社 (RAUCH Trading AG) を1982年に設立し (<https://www.moneyhouse.ch/de/company/rauch-trading-ag-20332239541> 2024年6月27日閲覧)、2005年にこの子会社でレッドブルをボトリングする工場も設立した (Historisches Lexikon der Schweiz <https://hls-dhs-dss.ch/de/articles/001339/2014-11-11/> 2024年6月28日閲覧)。ヴィトナウはアルペンライン川を挟んでフォラルベルク州のルステナウ (Lustenau) 町の対岸に位置する村である。筆者が2017年9月12日にラウフ社経営責任者のユルゲン・ラウフ氏に直接面談した際に、同氏はレッドブルのボトリングはニュツィダスとヴィトナウの2工場で行なっていることを語っていた。
- 12) <https://www.hkarchitekten.at/de/team/univ-prof-di-hermann-kaufmann/> 2024年6月21日閲覧。
- 13) <https://www.hkarchitekten.at/de/projekt/gemeindezentrum-ludesch/> 2024年6月20日閲覧。
- 14) 神山町はサテライトオフィスの立地で先駆的な役割を果たす一方で、町の有志が自分たち自身で楽しむために企画したさまざまな事業が成功し、結果として町の活性化につながったことで全国的に著名になった町である。その詳細については、例えば篠原 (2014)、NPO 法人グリーンバレー・信時 (2016)、神田 (2018) などを参照されたい。筆者は神山町の「神山つなぐ公社」理事の作田祥介氏から直接2019年7月3日に email で、また8月初めに筆者が同公社を訪問して再度そのことをうかがった。神山町には建築に造詣の深い人が東京から移住してこの町の活性化に尽力しており、この人の発案で神山町の興隆のために参考になるということでフォラルベルクを「神山つなぐ公社」の職員たちが訪問し、ルデシュ村の庁舎、グローセスヴァルザータールやブレーゲンツァーヴァルトの村々の公共建築物などを視察したとのことである。
- 15) <https://www.energieinstitut.at/gemeinden/das-e5-landesprogramm/e5-gemeinden-in-vorarlberg/e5-gemeinde-ludesch/> 2024年6月22日閲覧。
- 16) このことは Vorarlberg ORF.at (3.5.2018) に記されているが、山本 (2024a: 267-269) でより詳しく述べておいた。
- 17) ILLW のホームページで ÜBER UNS と題されたウェブサイトの冒頭に次の1文が記されている。"Aus Anlass der beabsichtigten Betriebsarealerweiterung der Ludescher Getränke riesen hat sich im April 2018 die parteiunabhängige „INITIATIVE LUDESCH – für einen lebenswerten Walgau“ formiert."。 <https://www.initiativeludesch.at/initiativeludesch/> 2024年6月1日閲覧。
- 18) INITIATIVE LUDESCH – für einen lebenswerten Walgau RUNDBRIEF Nr.1, Juni 2018. <https://www.initiativeludesch.at/wp-content/uploads/2019/01/Rundbrief1-Wer-wir-sind.pdf> 2021年4月10日取得、2024年6月18日再確認。この回状の末尾に回状の編集に携わった3名の氏名が掲載されている。Hildegard Hartmann、Christine Mackowitz、Walter Zerlauth である。インターネットでこの3名それぞれの氏名と Ludesch とをキーワードとして2024年6月18日に Google で検索したところ、いずれもルデシュに在住する人物であると思われるウェブサイトがヒットした。Hildegard Hartmann とは Bieleweg 49 に所在するハルトマン園芸農家 (Gärtnerei Hartmann) の一員ないし縁戚であると推定される。Christine Mackowitz とは Wingert Geissberg 19, Ludescherberg に住む修士 (Magister) の資格を有する女性と思われる。Ludescherberg はルデシュの村域内にある地区名である。Walter Zerlauth は Rösleweg 1 の Brühlhof で有機農業を営む農民である。 (<https://www.gaertnerei-hartmann.at/> <https://www.herold.at/telefonbuch/>

christine-mackowitz/ <https://www.meinbauernhof.de/verkaufsstelle/bruehlhof-710501/>  
なお、Hildegard Hartmann は回状第3号から Hildegard Burtscher という氏名に変わっている。Hildegard Hartmann が結婚した後の氏名であると推定される。この人物はテューリングベルクで有機農業を営む女性であり、2017年1月18日以来フォラルベルク自然保護委員会 (Naturschutzrat) のメンバーである。 <https://www.farmingfornature.at/praeamierung/nominierte/2024/hildegard-burtscher/> [https://www.oekonews.at/?mdoc\\_id=1112034](https://www.oekonews.at/?mdoc_id=1112034)

いずれも2024年6月18日閲覧。ヒルデガルト・ブルチャが自然保護委員会委員であることは次のサイトでも確認した。 <https://www.naturschutzrat.at/mitglieder>

19) この生産量を初めとする数値に関する根拠は明示されていない。1日当たり2400万缶のレッドブル生産というのは過大推計と思われる。オーストリアの全国紙 *Die Presse* (4.2.2008) によればニュツィダス工場での生産量は2008年時点で1時間当たり30万缶と記されている。仮に24時間操業であったとしても720万缶である。そのほかに1時間当たりペットボトル8万本、ガラス瓶4万本も生産しているが、これらはレッドブルではなくジュースであろう。また Tomaselli (2019) によれば、2018年にレッドブルは全世界で67億缶が販売され、このすべてがラウフ社のニュツィダス工場とスイスのヴィトナウ工場とでほぼ半々生産されたとのことである。365日の生産だったすれば1日当たりの生産量は約920万缶となる。

20) 農業青年会 (ラントユージェント) とは1974年4月に結成されたフォラルベルク州の農業後継者の団体である。これは州内を4つの地域 (Bezirk) に分けて組織されており、オーバーラントはその一つである。オーバーラントとは同州南部を意味しており、北部のウンターラントとの境はゲッツィス町の西に位置するクメンベルク (Kummenberg) という山であり、この山よりも南のライントールの一部とヴァールガウ、そしてモンタフォンなどを含む地域名である。 [https://vbg.landjugend.](https://vbg.landjugend.at/ueber-uns/geschichte-des-vereins)

<https://www.facebook.com/landjugend.oberland/>  
<https://www.silberbergmontafon.at/das-montafon-als-teil-voraralbergs/> いずれも2024年6月29日閲覧。

21) 「大地の自由」はフォラルベルク州の土地を投機対象とする動きを止めるために活動している団体であり、2011年に結成された。緑地帯の保全もその活動の重点の一つである。 <https://www.bodenfreiheit.at/ueber-uns.html> 2024年6月29日閲覧。ヴァイラ村の市民運動にも積極的に関わったことは山本 (2024b) で言及した。

22) 「ルツ川」の友」とはグローセスヴァルザータールの谷底を北東から南西に流れる川とその流域の自然保護及び余暇保養に積極的に関わる団体である。 <https://www.facebook.com/freunderlutz/> 2024年6月29日閲覧。

23) Lebensraum Weiler とは、ヴァイラ村にある緑地帯の一部を工場用地に変えると決定したヴァイラ村当局に抗議し、緑地帯保全のために2016年11月末に結成された市民運動組織である。詳しくは山本 (2024b) を参照されたい。

24) フォラルベルク自然保護委員会とは、州政府に対して自然保護に関わる案件について助言する公的な委員会である。その委員は州政府によって任命される。 <https://www.naturschutzrat.at/der-naturschutzrat> 2024年6月29日閲覧。

25) INITIATIVE LUDESCH – für einen lebenswerten Walgau RUND BRIEF Nr:2, Juni 2018. <https://www.initiativeludesch.at/wp-content/uploads/2018/11/Rundbrief-Nr.2.pdf> 2021年4月10日取得、2024年6月18日再確認。

26) <https://www.initiativeludesch.at/aktuelles/page/4/> 2022年8月3日閲覧。

27) <https://www.initiativeludesch.at/2018/11/11/demo-ludesch-2/> 2022年8月3日閲覧。このウェブサイトには8月30日という日付が付されているが、これは ILLW が発信した日を意味する。VOL.at (21.8.2018) には8月27日から8月31日までの5日間の行進日程を各日のデモ集会の場所とともに記されており、8月29日にフェルトキルヒからルデシュまで行進するとなっている。 *Der Standard*

- (29.8.2018)にも、ルデシュでのデモ行進と集会が8月29日に行なわれる予定であることが記されている。また、筆者の現地での体験によれば、ルデシュからビーラベルクまでわずか1日の徒歩で到達するのは不可能だが、2日あれば可能である。それゆえ、ルデシュ村でのデモは8月29日に実施されたことは確実である。
- 28) 5日間にわたるデモ行進を企画実行した主要4団体とは、この注記の最後に記した自然保護連盟のホームページによれば、アルプス保全協会(Alpenschutzverein)、アルプス協会(Alpenverein)、自然の友(Naturfreunde)、自然保護連盟(Naturschutzbund)である。この4団体だけでなく、他のさまざまな市民運動組織も加わったと記されている。このデモ行進全体を企画実行した団体の1つ自然保護連盟のホームページには、8月31日に行進を完遂したことを報ずる“AS LANGAT! 5-tägiger Protestmarsch”という標題でのウェブサイトがある。ただし、このウェブサイトに掲載されている写真は8月27日のデモ開始日にプレーゲンツ港で撮影された集合写真であり、この時に集まったのは約100名前後だったと推定される。その中には州政府の環境担当僚僚ラウフもいた。この出発日の集会でラウフはデモ行進に賛同し、その意義を述べる挨拶をしたことが、後のウェブサイトから分かる。 <https://naturschutzbund.at/newsreader/items/as-langat-5-taegiger-protestmarsch.html> 2024年6月4日取得。 <https://cba.media/382340> 2024年6月4日聴取。なお、AS LANGAT!とは、es langtというドイツ語表現のフォラーベルク方言であると考えられる。ILLWの回状第3号(2018年10月発行)に添付された写真にノイグートにある収穫後の畑でのデモ集会の様子を上空から写した写真があり、これにES LANGTという文字が白く書かれている。国松ほか(1985: 1321)によれば、このドイツ語表現は「もう我慢できない」という意味である。
- 29) INITIATIVE LUDESCH – für einen lebenswerten Walgau RUNDBRIEF Nr.3, Oktober 2018. <https://www.initiativeludesch.at/wp-content/uploads/2018/11/Rundbrief-Nr.3.pdf> 2021年4月10日取得、2024年6月18日再確認。
- 30) INITIATIVE LUDESCH – für einen lebenswerten Walgau RUNDBRIEF Nr.4, Oktober 2018. <https://www.initiativeludesch.at/wp-content/uploads/2018/11/Rundbrief-Nr.4.pdf> 2021年4月10日取得、2024年6月18日再確認。
- 31) ちなみに、“KLÄRUNG NACH GERÜCHTEN: Red Bull kauft 1000 Liter Schweizer Wasser für knapp einen Franken ein”というタイトルのスイスのインターネット配信ニュース(2020年11月21日付)によると、ザンクトガレン州ヴィトナウでレッドブルのボトリングをしているラウフ社が、そのための地下水利用に対してどれだけの使用料金を払っているかが長年にわたって秘密だったが、Rheintaler というスイスの地方新聞を発行している会社がヴィトナウ村当局にザンクトガレン州の情報公開法(Öffentlichkeitsgesetz)に基づいて情報公開を請求したところ、ラウフ社は地下水1m<sup>3</sup>あたり1フラン弱を村当局に対して支払っていることが明らかとなったと報じた。この村では1年間に2万m<sup>3</sup>以上の地下水を使用している企業は、個別交渉で使用料金を定めることができるとされているとのことである。他方でレッドブルの生産のためには砂糖も多く使う。上記のインターネット配信ニュースには、SRF-Rundschau というスイスのラジオ番組で、レッドブル生産のためにスイスで生産される砂糖の約4分の1がレッドブル生産のために用いられており、ラウフ社ヴィトナウ工場がスイス最大の砂糖消費事業所だという。 <https://www.20min.ch/story/red-bull-kauft-1000-liter-schweizer-wasser-fuer-knapp-einen-franken-ein-917142899280> Publiziert 21. November 2020, 13:15 2024年6月28日閲覧。
- 32) INITIATIVE LUDESCH – für einen lebenswerten Walgau RUNDBRIEF Nr.5, November 2018. <https://www.initiativeludesch.at/wp-content/uploads/2019/01/Rundbrief-Nr.-5.pdf> 2021年4月10日取得、2024年6月18日再確認。
- 33) INITIATIVE LUDESCH – für einen lebenswerten Walgau RUNDBRIEF Nr.6, Jänner 2019. <https://www.initiativeludesch.at/wp-content/uploads/2019/>

- 03/Rundbrief-Nr.-6.pdf 2021年4月10日取得、2024年6月18日再確認。
- 34) この表は次のウェブサイトでご覧できる。<https://vorarlberg.at/documents/302033/6186948/REK+Blumenegg+-+Tabellarische+Auswertung.pdf/35da8996-585d-d888-f2cb-fda9a50f7719?t=1648707897681>
- 35) フォアールベルク州政府が2009年8月13日に発信したニュースリリースにそのことが記されている。Presseaussendung・13.08.2009 In Ludesch produziert, in der Welt konsumiert. LH Sausgruber besichtigte neues Red Bull-Werk in der Walgaugemeinde Ludesch <https://presse.vorarlberg.at/land/dist/vlk.html?id=31419> 2023年6月20日取得。このウェブサイトには、レッドブル社工場の責任者であるローラント・コンチン、視察したザウスグループ(Sausgruber)州首相(当時)、ラウフ社の当時の社長ローマン・ラウフ(Roman Rauch)、そしてルデシュ村村長ラウアマンのレッドブル社事務所前での集合写真も掲載されている。
- 36) もともとルデシュ村ノイゲートの緑地帯に2007年に立地したアルミ缶製造工場はイギリスに本拠を置くレグザム(Rexam)社の子会社だったが、レグザム社は2016年にアメリカの多国籍大企業ボール社に吸収された。 <https://www.webpackaging.com/en/portals/ballcorporation/assets/11027740/rexam-invests-further-in-austrian-beverage-can-plant/> [https://ec.europa.eu/commission/presscorner/api/files/document/print/en/ip\\_16\\_80/IP\\_16\\_80\\_EN.pdf](https://ec.europa.eu/commission/presscorner/api/files/document/print/en/ip_16_80/IP_16_80_EN.pdf) いずれも2024年7月2日閲覧。
- 篠原 匡 (2014) 『神山プロジェクトー未来の働き方を実験するー』日経BP社。
- 山本健児 (2024a) 『「隠れたチャンピオン」を輩出する地域ー欧州における小規模農村的地域の事例ー』古今書院。
- 山本健児 (2024b) 「緑地帯への工場立地計画に抗する市民運動ーオーストリア・フォアールベルク州ヴァイラ村の事例」、『経済学研究』(九州大学経済学会) 第90巻第5/6号、pp.35-70。
- 山本健児 (2024c) 「オーストリア・フォアールベルク州における緑地帯をめぐる論争ー2016/17年に起きた紛争解決のための民主主義的なプロセスー」、『経済学研究』(九州大学経済学会) 第91巻第1号、pp.33-63。
- Amt der Vorarlberger Landesregierung. Abteilung Raumplanung und Baurecht (VIIa) und Landesstelle für Statistik (2018) *Strukturdaten Vorarlberg*.
- Amt der Vorarlberger Landesregierung Landesstelle für Statistik (2023) *Agrarstrukturhebung 2020*. <https://vorarlberg.at/documents/302033/472605/Agrarstrukturhebung+2020.pdf/6803b1a7-1d18-ae86-ec8d-fe56d65cd149?t=1674740439203>
- Blumenegg Räumliches Entwicklungskonzept 2013* Entwurf Bregenz, 3. 10. 2013. [https://wiki.imwalgau.at/images/REK-Blumenegg\\_Entwurf\\_03Okt2013.pdf](https://wiki.imwalgau.at/images/REK-Blumenegg_Entwurf_03Okt2013.pdf) 2024年6月5日取得。
- Der Standard* (29.8.2018) Betriebserweiterung Energydrinks statt Gemüseanbau im Walgau <https://www.derstandard.at/story/2000086212766/betriebserweiterung-energydrinks-statt-gemuese-anbau-im-walgau> 2024年6月1日取得。
- Die Presse* (4.2.2008) Säfte: Der verschwiegene Vorarlberger Getränke-Riese.
- Räumliches Entwicklungskonzept Ludesch 2015* gemäß Gemeindevertretungsbeschluss vom 18. 6. 2015 [https://www.wiki.imwalgau.at/images/REK-Ludesch\\_20150618.pdf](https://www.wiki.imwalgau.at/images/REK-Ludesch_20150618.pdf) 2024年6月5日取得。
- Räumliches Entwicklungskonzept Walgau (REK Walgau)*. Regionale Grundsätze und Ziele der räumlichen Entwicklung im Walgau. Version zur Auflage vom 18 Sept. 2014 <https://wiki.imwalgau.at/images/REK->

## 文献

- NPO 法人グリーンバレー・信時正人 (2016) 『神山プロジェクトという可能性~地方創生、循環の未来について』廣済堂出版。
- 神田誠司 (2018) 『神山進化論：人口減少を可能性に変えるまちづくり』学芸出版社。
- 国松孝二・岩崎英二郎・橋本郁雄・濱川祥枝・小野寺和夫・原田武雄・千石喬・中島悠爾・平尾浩三・三城満禱・楯原良行・新田春夫(編) 『独和大辞典』小学館。

- Walgau\_Endfassung-zur-Auflage-vom-18Sept2014.pdf  
 Tomaselli, Eliza (2019) Aufruhr im Rauchtal. Wem gehört das Grünland? In Vorarlberg ringen Anrainer; Industrie und Politik um eine Antwort. In: *DATUM Magazin* Ausgabe April 2019, S.64-69 <https://datum.at/aufuhr-im-rauchtal/> 2024年7月2日閲覧。なお、この pdf 版は ILLW のホームページのウェブサイト (<https://www.initiativeludesch.at/2019/05/06/aufuhr-im-rauchtal/>) から入手可能であり、筆者はこれを2021年4月10日に入手した。
- VOL.at (21.8.2018) “As langat”: Umweltschutz marschiert gegen Bodenpolitik <https://www.vol.at/as-langat-umweltschutz-marschiert-gegen-bodenpolitik/5897960> 2024年6月4日取得。
- Vorarlberg ORFat (7.2.2006) Der Fruchtsafthersteller Rauch hat seinen Produktionsstandort in Nüziders erweitert. <https://vbgv1.orf.at/stories/88019> 2024年6月28日取得。
- Vorarlberg ORFat (7.12.2009) Red Bull-Werk stellt Grundmischungen her <https://vbgv1.orf.at/stories/408092> 2024年6月5日取得。
- Vorarlberg ORFat (7.10.2013) Blumenegg-Gemeinden beschließen REK <https://vorarlberg.orf.at/v2/news/stories/2607486/> 2024年6月3日取得。
- Vorarlberg ORFat (13.2.2014) 15 Mio Euro für Bahnhofs Ausbau in Ludesch <https://vorarlberg.orf.at/v2/news/stories/2630849/> 2024年6月5日取得。
- Vorarlberg ORFat (11.12.2015) Neue Güterzuganlage in Ludesch eröffnet <https://vorarlberg.orf.at/v2/news/stories/2746880/> 2021年4月10日取得。
- Vorarlberg ORFat (3.5.2018) Kritik an Rauch-Betriebserweiterung in Grünzone <https://vorarlberg.orf.at/v2/news/stories/2910566/> 2020年6月19日取得。
- Vorarlberg ORFat (6.7.2018) Bauern Aufstand gegen Betriebserweiterungen <https://vorarlberg.orf.at/v2/news/stories/2923079/index.html> 2024年4月10日取得。
- Vorarlberger Nachrichten* (30.10.2014) “Betriebe machen das Dorf attraktiv” Gemeindeentwicklung und Wirtschaftspolitik: Bürgermeister Lauer mann im VN-Gespräch。

### 初校を終えての追記

2024年10月17日に九州大学経済学会事務局から初校ゲラを受け取り、拙稿の根拠資料を再点検したところ、注3)に記したURLでのウェブサイトにはアクセスできなくなっていることが分かった。注2)に記したURLでのウェブサイトにはアクセスできるものの2024年8月初めに閲覧した時のポータルサイト画面とは異なっていることに気がついた。この間に Regio Walgau に関するホームページが作り替えられたことになる。これを本文では地域名称と書いたが、正確には Regio im Walgau という14のゲマインデが結成した団体 (Verein フェライン) である。その概略については下記のURLで知ることができるし、団体の会則もその後に記したURLでのウェブサイトから入手できる。

[https://www.imwalgau.at/Die\\_Regio\\_Im\\_Walgau/Ueber\\_Uns/Was\\_ist\\_die\\_Regio\\_Im\\_Walgau](https://www.imwalgau.at/Die_Regio_Im_Walgau/Ueber_Uns/Was_ist_die_Regio_Im_Walgau)  
[https://www.imwalgau.at/Die\\_Regio\\_Im\\_Walgau/Ueber\\_Uns/Leitsaetze\\_und\\_Statuten](https://www.imwalgau.at/Die_Regio_Im_Walgau/Ueber_Uns/Leitsaetze_und_Statuten) いずれも2024年10月28日閲覧。

[九州大学名誉教授]

## The Second Grass-roots Movement against an Expansion Plan of Factories into a Site in the Green Belt of Vorarlberg, Austria

Kenji YAMAMOTO

The purpose of this paper is to describe the second grass-roots movement for conservation of the Green Belt in Vorarlberg. The *Land* government decided to keep the Green Belt in its current state in Walgau as well as in Rheintal in 1977 in order to conserve the natural ecology and landscape, areas for daily recreational activities of the people and the farmland for effective agriculture. However, some parts of it have been transformed to factory sites because of the development of manufacturing companies.

The second movement was organized by the local citizens' group of "*Initiative Ludesch – für einen lebenswerten Walgau*" (abbreviated as ILLW) in April 2018. Ludesch is a rural municipality in Walgau, which lies between two cities, Feldkirch and Bludenz, in the southern part of Vorarlberg. The present author analyzes various documents, namely circulars published by the movement organization, mass media articles, and the official spatial plans by the communal authorities. These documents are to be gotten either in the Homepage of ILLW (<https://www.initiativeludesch.at/>) or by means of the internet search by the present author himself.

The locale is the farm land Neugut in Ludesch, which was reclaimed from forest in the 1930s. Now it is one of the most fertile farmland in Vorarlberg. The target of criticism by ILLW is RAUCH Fruchtsäfte GmbH & COG, which is the largest fruit juice maker in Austria. It also bottles Red Bull almost monopolistically for this energy drink maker. ILLW includes several farmers as its active members, while it was not the case at Weiler in Rheintal, where the first grass-roots movement for the Green Belt in 2016 and 2017 protested against the communal authorities which had decided to transform area of 4.5 ha from the Green Belt in 2015.

The communal authorities of Ludesch had already decided the exclusion of the farmland "Neugut" of about 16 ha from the Green Belt at latest in 2013. In October in this year, the spatial plan "*Blumnegg Räumliches Entwicklungskonzept 2013*" was completed by the three municipal authorities in Blumnegg, a subregion within Regio Walgau. Ludesch is one of the three municipalities and decided its own spatial plan "*Räumliches Entwicklungskonzept Ludesch 2015*" on 18<sup>th</sup> June, 2015. Regio Walgau, members of which are 14 rural municipalities in Walgau, decided its principle of the spatial plan for the whole region on 18th September 2014. It regards foundation and expansion of manufacturing industry as important for the regional development.

The farmers who were engaged with the cultivation at Neugut opposed the exclusion of their farmland from the Green Belt in 2014 at latest, because it was the existence base for them and its soil was very good for ecologically producing various vegetables and crops for the regional consumption. But the communal authorities and *Land* government did not listen to their voices and moved forward with the spatial plan, with which Rauch and its suppliers would be able to expand the production volume of Red Bull. The politicians regarded the increase of tax revenue and employment opportunities in the manufacturing industry as more important than the organic farming, ecological conservation of land and local practices coping with climate change, although the *Land* government had already declared "Eco-Land Vorarlberg Regional and Fair" in 2012.

ILLW sought to hold a referendum for the conservation of the Green Belt at Neugut in Ludesch from the beginning of the grass-roots movement, so that they distributed circulars, with which they intended to inform the realities of the farmland within the Greenbelt and the underground-water policy by the *Land* government and the communal authorities. They believed that the established mass media had not inform the people this issue

enough. The present author will describe the results of the grass-roots movement in 2019 and later on another occasion.

(Professor Emeritus of Kyushu University)